

第7章 総括

これまでに実施された周辺の調査では、大規模な流路や溝、弥生時代・古墳時代の集落など多くの遺構が検出されていた。今回の調査地は、それらを検出した調査区と隣接しており、いくつかの遺構でその延長部が確認できた。また集落の一部も検出され、周辺で確認されていた集落との関係や、その広がりなどが明らかとなった。以下、これまでの調査成果もあわせて考察し、まとめとする。

弥生時代中期前葉の集落 A区の第9面で、多くの土坑とともに竪穴建物2棟と掘立柱建物1棟を検出した。出土する遺物はいずれも弥生時代中期前葉（第Ⅱ様式）のものであり、これにより遺跡の北方にこの時期の集落が広がっていたことが明らかとなった。ただし、遺構が密集しているような状況ではなく、集落の中

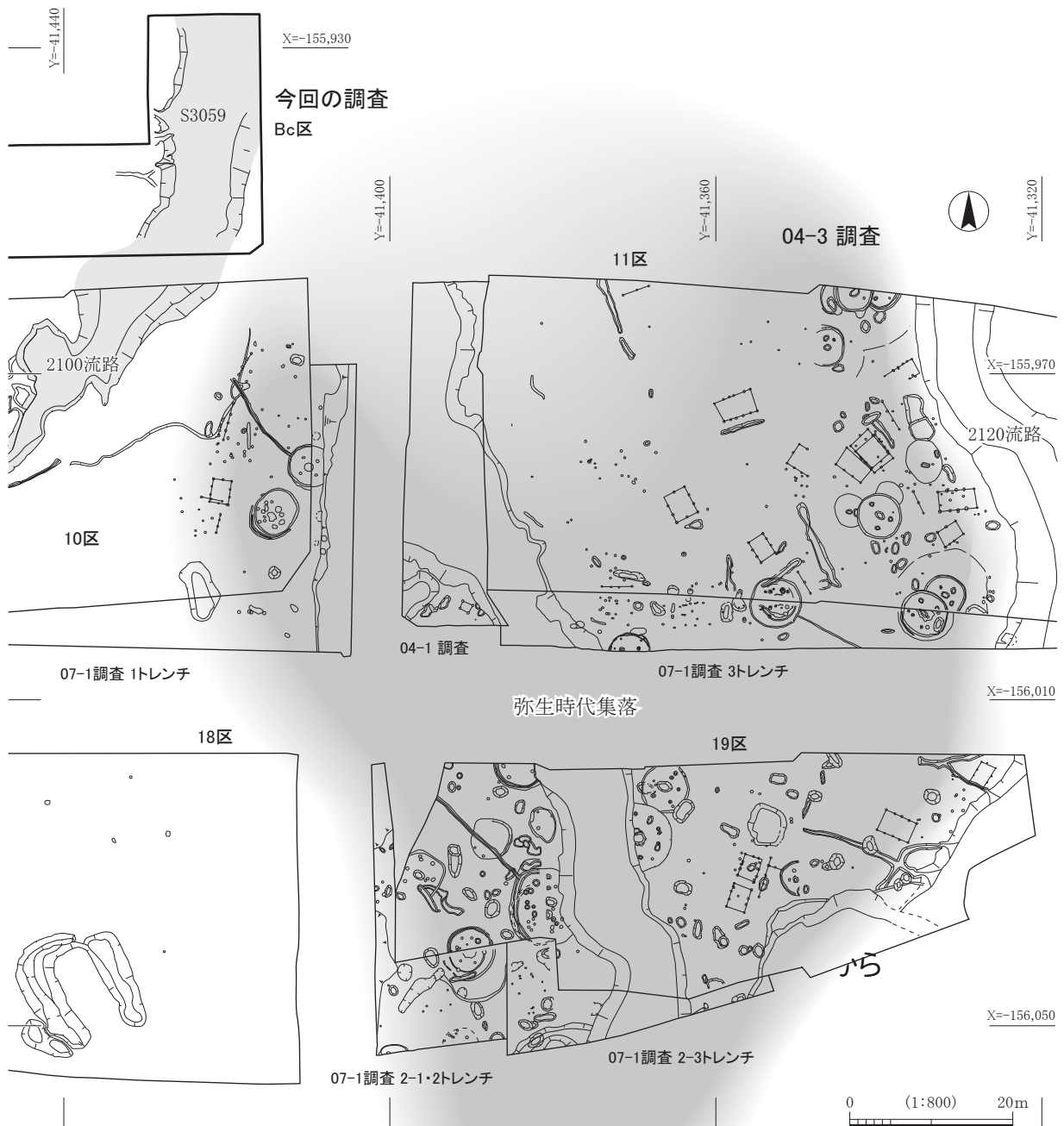


図 82 B c 区南東側にみられる弥生時代集落の広がり

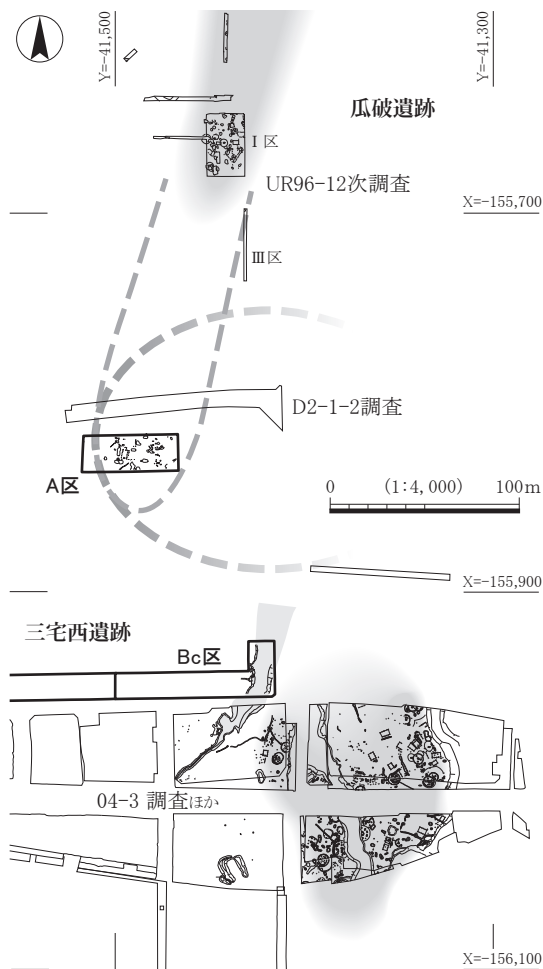


図 83 弥生時代集落の分布

では、もう一方の集落はどうか。

A区北側の集落は、三宅西遺跡範囲外の瓜破遺跡内に展開しており、財団法人大阪市文化財協会によるUR 94-19・96-12・97-19次調査で確認されたものである。そのうちもっとも密に遺構が検出された調査区は、A区から北に約170m隔てたUR 96-12次調査のI区である。ここでも弥生時代中期前葉に限られた短期的な集落が確認されており、竪穴建物や掘立柱建物のほか、溝や土坑・ピットなど、折り重なるように築かれた無数の遺構が検出されている。一見集落の中心部のような遺構密度であるが、それでも土器の出土量や周辺を含めた遺構の分布状況から、集落の中心ではなく、南西縁辺の一部ではないかとされており、中心は調査地より北側が想定されている。確かに、I区の南側に設定された南北に長いIII区では、遺構が稀薄であり、集落がさらに南に広がっている様子はうかがえない。

では、今回A区で確認された集落の一部は、これまでに周辺で確認されていた集落とはまったく別の集落だったのか。

Bc区南東側に中心をもつ集落との関係については、集落境を成すと考えられるS3059を挟んでいることから、上記のとおり、A区まで集落域が広がっていたとは考え難い。瓜破遺跡側に広がる集落との関係については、UR 96-12次調査I区より南側で遺構が稀薄となることは看過できないが、A区との間に集落境を成すような施設が検出されていないことなどから、現時点では、この瓜破遺跡側に広がる集落の南末端部である可能性の方が高いのではないかと考えている。ただし、南東側の集落と瓜破遺跡側の集落との間の、ちょうどA区の東側あたりに、それらとは異なる別の集落が展開していた可能性も想定しておきたい。

心部ではないような印象を受ける。おそらく、周辺に広がる集落の縁辺部にあたっていると思われる。

では、この集落の中心はどのあたりにあったのか。

これまでに実施された周辺の調査では、A区の南東側と北側の2箇所、今回みつかった集落と同時期の弥生時代中期前葉の集落が確認されており、そのどちらかの一部ではないかと考えられた。

南東側の集落は、阪神高速道路大和川線建設に伴い、当センターによって実施された04-3・07-1調査などで確認されたもので、今回調査したBc区のすぐ南東側、A区からは約200m隔てたあたりに広がっている。しかしこちらの集落は、南限については不確実なところがあるものの、遺構の分布状況から、東は2120流路、西は2100流路に至る自然の傾斜地までの範囲とほぼ判明しており、北側についても、04-3調査の10・11区よりも北へはほとんど遺構が展開していないことから、北限を遺構が稀薄となる10・11区の北側あたりとした、直径100m程度の集落範囲が推定されている。遺構の分布状況や、西限とされるS3059(04-3調査では2100流路)の位置などをみても、この南東側に広がる集落がA区まで続いているとは、やはり考え難いように思われる。

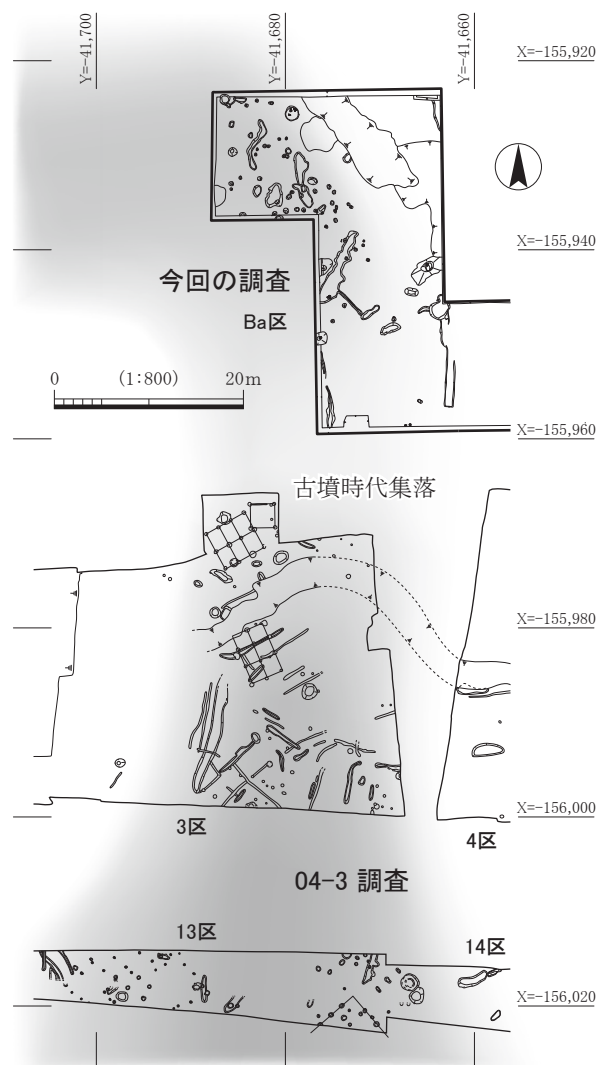


図 84 B a 区周辺にみられる古墳時代集落の広がり

古墳時代須恵器出現期前後の集落 B a 区では新たに古墳時代前期（庄内式期後葉から布留式期前葉）の集落を確認した。ただし、その分布範囲は B a 区西端部に偏っており、東半部には展開していない。検出した遺構も土坑やピットが主で、建物跡が未検出であることから、この集落の中心は、B a 区よりさらに西側にあったと推定できる。つまり B a 区の西端部が辛うじてその集落の東縁辺にかかっていたような状況と考えられる。検出した遺構からは須恵器がまったく出土しておらず、ほとんどが庄内式期後葉から布留式期前葉頃の土師器であること、また遺構を覆う 7 a 層をみても、上面から出土した土器の中に混入品と思われる須恵器甕の体部片が 1 点含まれているのみで、ほか須恵器はまったく出土していないことから、この集落は、須恵器が出現する以前に営まれていた古墳時代前期の短期的な集落であったと判断できる。

これと同時期の集落は、これまでの調査では確認されていないが、このすぐ後に続く須恵器を伴う時期の集落が、今回みつかった集落のすぐ南側で確認されている。当センターが実施した 04-3 調査の 3・13・14 区で検出されたもので、掘立柱建物のほか、井戸や土坑、ピットなど多くの遺構が、北側の B a 区に向かって舌状に広がっている。両者は非常に近接しており、集落範囲の線引きが難しい。この南側に広がる集落の時期については、遺物包含層や遺構から出土した遺物のなかに初期須恵器が何点も含まれていることから、中心は須恵器が出現して間もない、古墳時代中期の 5 世紀前葉頃であったと考えられるが、遺構を

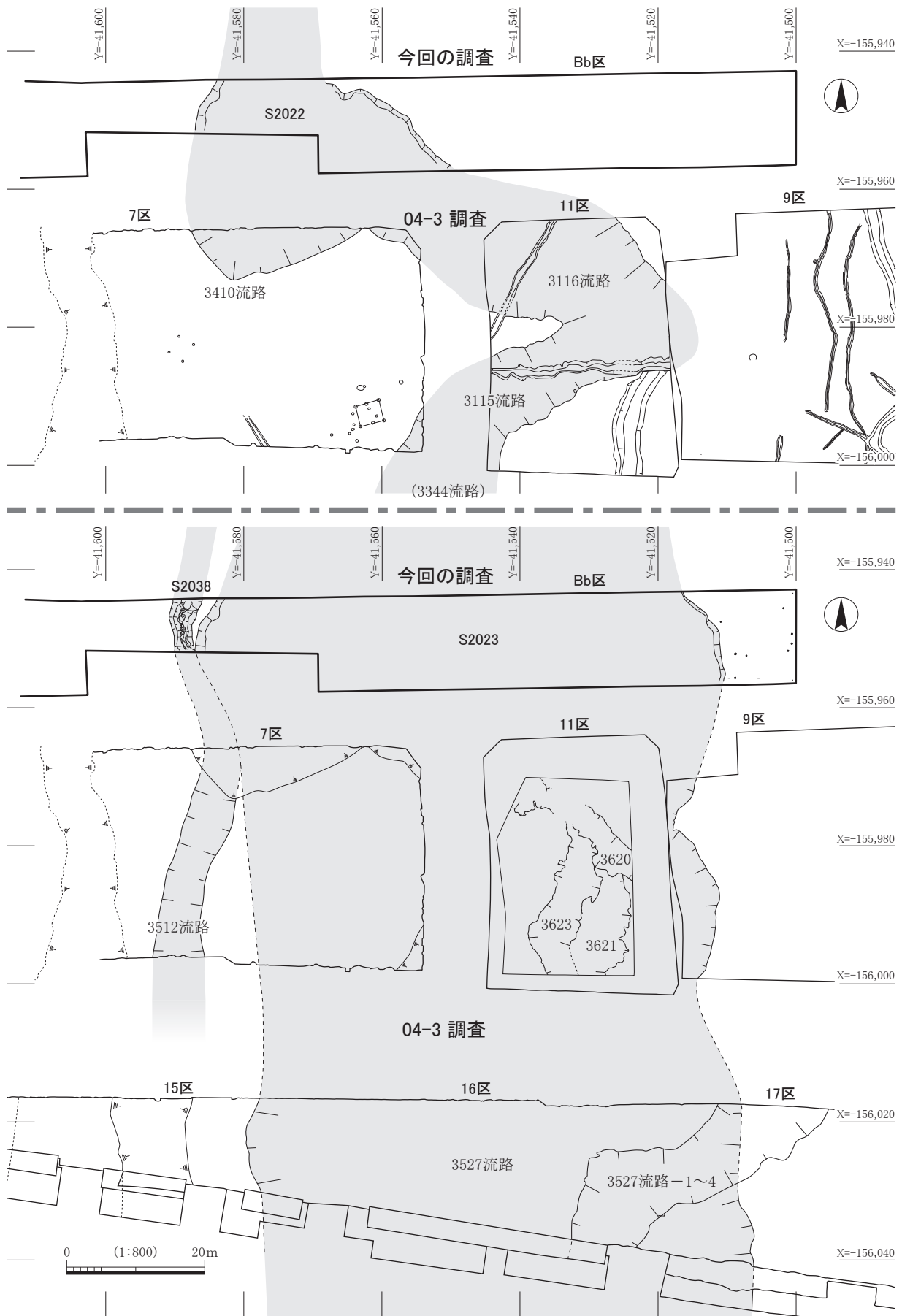


図 85 既往調査との遺構のつながり（上：S2022・下：S2023・S2038）

詳しくみると、庄内式甕など B a 区側の集落と同時期の遺物が出土する遺構もある程度存在しており、須恵器出現前の段階から、集落の一部として、すでに土地利用されていたことがうかがえる。

つまり、B a 区から西側に広がる集落と、04-3 調査で確認した集落とは、一見時期の異なる別々の集落のようにみえるが、実際には、両者には完全な分断があったわけではなく、集落が形成された当初の古墳時代前期には、南北に長い一つので集落であった可能性が高い。おそらく、① 古墳時代前期に B a 区の西側に集落が形成された。その中心は B a 区の西側あたりであったが、縁辺は 04-3 調査区内まで広がっていた。② 須恵器が出現して間もなくの頃、集落の中心を南の 04-3 調査区側へ移した。というものだったのでないだろうか。ただしこの時、B a 区側の集落内に須恵器がまったく含まれていないことは注意したい。集落の中心が南に移って以降も、B a 区側の集落範囲が土地利用されていたとした場合には、おそらく B a 区側の集落内にも須恵器が混入するはずであるが、実際にはまったく混入していない。つまり、B a 区側の範囲は、短期間で完全に放棄され、その後まったく使われなくなったと考えなければならない。

それ以降の集落については、現時点では前述の弥生時代中期前葉の集落が形成された B c 区の南東側一帯に移動したと考えているが、先の B a 区南側の集落についても、数は少ないものの、古墳時代後期の 6 世紀中葉の須恵器が含まれる遺構も確実に存在していることから、細々とではあるが、その頃まで集落が存続していたのではないかと考えている。

遺構の変遷 今回の調査では大規模な流路や溝を幾筋も検出した。それらとこれまでの調査で検出された遺構とのつながりやその変遷について簡単に整理しておく。

縄文時代には B a 区の流路 S1020 (04-3 調査では 3128 流路)、B b 区の流路 S2023 (04-3 調査では 3527 流路) や溝 S2038 (04-3 調査では 3512 流路か) が形成されていた①。それぞれが機能していた時期については、以前に出土した土器から、S1020 が縄文時代後期中葉、S2023 が晩期前半頃と推定されたが、今回実施した放射性炭素年代測定では、S2023 下層出土の流木が縄文時代早期のものであることが明らかとなり、S2023 の形成時期についてはさらに古く、縄文時代早期にまで遡る可能性が出てきた。これらの流路は、長い年月をかけて徐々に埋まっていくが、縄文時代晩期になっても埋まりきることはなく、あ

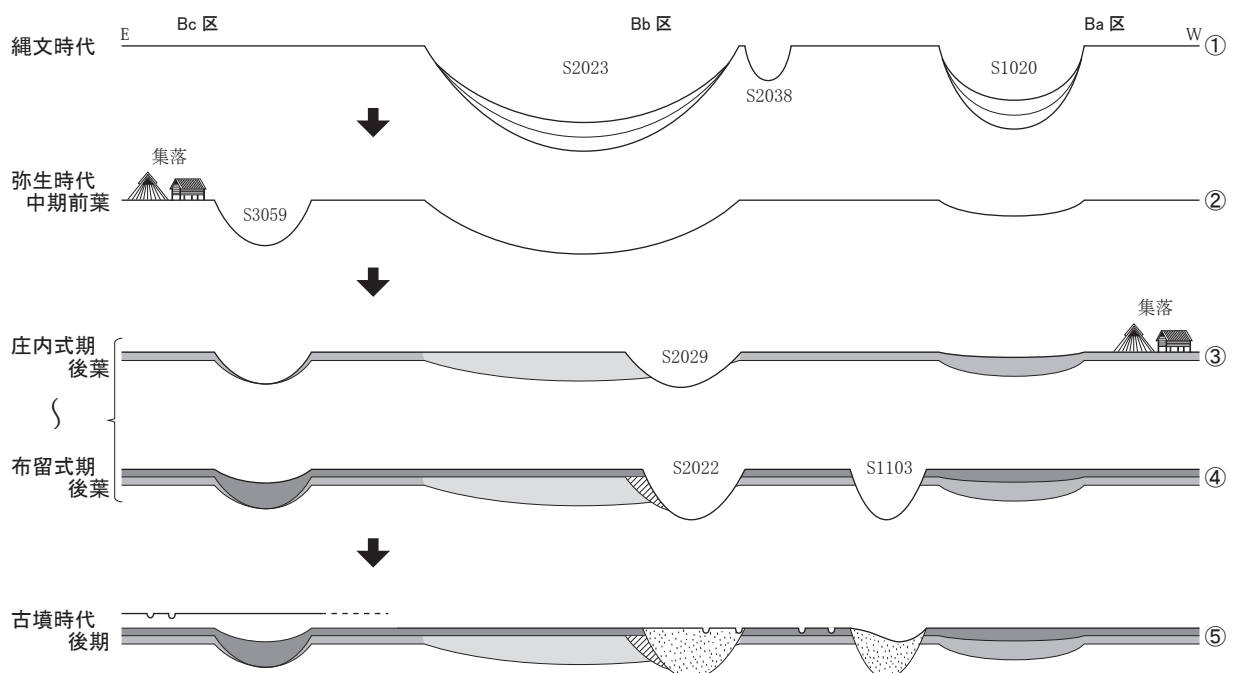


図 86 B 区の景観変遷

る程度の水流のある流路として残る。

弥生時代中期前葉になると、B c 区の東端に流路 S3059（04-3 調査では 2100 流路）が形成され、それを境に東側には集落が営まれる②。おそらく S2023 は、さらに埋没が進んでいるものの、この頃も完全に埋まりきることはなく、浅い流路として存在していたものと思われる。

その後、S2023 上を除いて 8 層（B c 区では 7 e ii・iii 層）が形成され、B a 区西側に古墳時代前期（庄内式期後葉～布留式期前葉）の集落が営まれる③。S2023 の埋没時期については判然としないが、この B a 区の集落が営まれている時期には、ほぼ埋まっていたのではないかと考えている。S2023 が埋まりきった後、その西端部には一旦 S2022 の前身となる流路 S2029 が形成されるが③、間もなくこの S2029 上も含め、調査区全体を 7 層（B a 区では 7 a 層、B c 区では 7 e i 層）が覆う。その時期は、B a 区の 7 a 層上面で検出できる流路 S1103（04-3 調査では 3125 流路）に布留式期後半の須恵器出現期頃の土器が多く含まれていることから、それよりも古い時期、つまり B a 区西側の集落が営まれてからあまり時を経ない布留式期のうちに形成されたと考えられる。この時 B b 区には、先の S2029 に重なるように新たに流路 S2022（04-3 調査では 3410・3116・3115・3344 流路）が形成されるが④、S2023 のように長くは機能せず、短期間で埋没する。その時期は、西側の S1103（3125 流路）に僅かながら 6 世紀中葉の須恵器が含まれていることから、遅くともその頃までにはほとんど埋まっていたのではないかと考えている。

この S2022 が完全に埋まって以降すぐに、B b 区には S2006・2008 をはじめとした幾筋もの溝が設けられ、B c 区の東端にも同様の小規模な遺構が形成される⑤。S1103 については、B b 区第 7 面で検出した S2004 などの溝と一時期併存していた状況がうかがえることから、S2022 が埋まって以降も、しばらくの間流路として機能していたと思われる。

以上が、B 区を中心とした大まかな遺構の変遷であるが、庄内式期後葉から須恵器が出現する布留式期後葉のにかけて、三宅西遺跡内が大きく景観を変えていく状況がうかがえたいへん興味深い。その背景や経緯など、周辺地域の動向とも重ねながら解明していく必要がある。

今回の調査成果を中心に、周辺の遺構とのつながりを確認するとともに、集落の範囲や景観変遷などについても若干考察した。ただし、これまでに実施した周辺調査の成果とは、出土遺物以外、層序の対応関係などについては十分な比較・検討ができておらず、遺構のつながりやその時期などにいくつかの誤認があるかもしれない。また今回の調査では、細い調査区内を幅の広い流路や溝が幾筋も横断していたため、地層が途中で分断され、その正確な対応関係の把握が困難な箇所もあった。本書内では、B a 区から B c 区までの地層を、確実な箇所を手掛かりに、理解しやすいようつなげているが、実際には本書でまとめたような単純に連続するものではなかった可能性も考えられる。出土遺物についても、層位的に考えられる時期と大きく隔てた古い時期のものばかりが出土している状況も多く、検討の余地を残している。

前年に実施した D 2-1-2 調査や、今後実施される調査の成果も合わせ、もう少し広い視野に立つての再検討が必要かもしれない。

引用・参考文献

- ・財団法人 大阪市文化財協会 1999『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 —1996 年度—』「第Ⅲ章 瓜破遺跡の調査」
- ・財団法人 大阪市文化財協会 1999『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 —1997 年度—』「第Ⅲ章 瓜破遺跡の調査」
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2009『三宅西遺跡』
- ・松原市教育委員会・公益財団法人 大阪府文化財センター 2024『三宅西遺跡』